色彩教材研究会通信　No.453　2025.7.31
発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

●色彩寸論 「トーン」という用語

色彩体系は通常、色相、明度、彩度の３属性で説明される。これを分かり易く簡便化したのが２属性体系であり、色相および明度・彩度を複合化した形容語で表記される。

日本で普及している例が「PCCS(日本色研配色体系)」(1964) と「JIS Z 8102：201 物体色の色名」の系統色名体系である。両者はアメリカの「ISCC-NBS(アメリカ色彩協議会 - 国家標準協会) 色名法」(1955) を参考にして開発された。ただし明度・彩度の複合語の呼称は PCCS が「トーン」、系統色名では「明度及び彩度に関する修飾語」なので、関係者会議で統一するのが好ましい。

先ず「トーン」の採用はどうかが検討されるが、他国語では解釈が拡散するため適語ではないと理解され、ここは無理をしないで不採用が結論となる。日本語で「色調」も使われているが、色相と紛らわしいので避けるのが無難。造語では明彩調、彩明調が考えられるが、語感が馴染みにくい。そんなこんなで今後も継続審議がされよう。そこで私案を紹介しておきたい。ISCC-NBS での属性呼称「color name block」を借用し「tone name block」、略して「トーンブロ」、和名で「色調区画」、全体を「色相・色調区画色彩体系」と呼ぶのは如何であろうか。(北畠耀)

●国宝展に観る色彩

2025 年春、大阪・関西万博開催記念として、大阪市立美術館では、「日本国宝展」、京都国立博物館では、「日本、美のるつぼ」、奈良国立博物館では、「超 国宝―祈りのかがやき―」と題された特別展が、ほぼ同時期に関西三都市で国宝展が開催されました。

国宝が同時期にこれだけ一度に、しかも関西に集まることはないとの事で三館を鑑賞してきました。

今ほど色に自由度はなかったであろうにも関わらず、国宝には、神性と威厳、知性が色で表現されていました。

また色彩豊かに感じるのは補色が上手く使われていることと大きく関わりがあるようです。

帝釈天の説明書きにも、赤と緑の使われ方（補色）について触れられていました。

国宝を通して色彩は信仰・文化・技術の融合であり、単なる装飾ではなく意味を持ち国交にも大きく影響を与えていたのだと、万博開催中にみると、よりその力を感じるものでした。

（幹事　水野智子）

●大辞泉ひろいよみ　85ーこ

黄竜旗：こうりょうき。中国の清朝の国旗。黄色の地に竜を描いた旗。

光量子：こうりょうし。光子。

光力：こうりょく。光の強さや明るさ。

光輪：こうりん。キリスト教美術で、キリスト・聖母・天使などの聖性・栄光の象徴として頭のまわりに描かれる輪。輪光。ニンプス。仏・菩薩のからだから発する円満の光。衆生の煩悩を砕く智慧の光。

光臨：こうりん。他人を敬って、その来訪をいう語。

紅涙：こうるい。血の涙。悲嘆にくれて流す涙をいう。女性の涙をたとえていう。

紅簾石：こうれんせき。カルシウム・マンガン・鉄・アルミニウムを含む珪酸塩鉱物。桃色の柱状結晶。単斜晶系。

紅炉：こうろ。火がさかんに燃えているいろり。

黄櫨染：こうろぜん。染め色の名。黄色みがかった茶色。黄櫨（はぜ）の樹皮と蘇芳の心材に、灰汁・酢などを混ぜて染めたもの。嵯峨天皇以来、天皇の袍に用いられる。

紅楼：こうろう。朱塗りのたかどの。美人のいる富家や妓楼などをさしていう。

＊大辞泉：小学館発行国語辞典　（永田泰弘）